

## 【審査論文】

## アニメ『Madlax』におけるジャンル規定概念の攪乱： パースペクティブを解体した不定形の仮構と原型あるいは仮構内リアリティ (2)

黒田 誠

### The Annihilation of Genre Axes in *Madlax*: Amorphous Fiction of Dislocated Perspectives and Archetypes / Fictional Reality 2

Makoto KURODA

## 要旨

真下耕一監督のアニメ作品『Madlax』を対象に、仮構作品が鑑賞手順として要求する仮構世界受容の過程において前提とされる暗黙の了承事項が意図的に脱臼させられ、全方位的に仮構的意味構成軸を散乱させる表現が達成されている実態を検証する。これは独特の創作戦略を採用した演出における詳細記述の内実をユング心理学におけるプレローマ世界の発想と照らし合わせることにより、仮構的リアリティの本質に対する形而上的把握を図ることを目的とするものである。本稿はこの企図に基づき全26話中の第3話から第5話までの映像表現の概念化を図り、原型的多義性を反映したハイパーナチュラルな主題提示手法についての考察を進めたものである。

キーワード：パースペクティブ、ジャンル概念、仮構、仮構内リアリティ、原型  
perspective, genre concepts, fiction, fictional reality, archetype

## 第3話「蒼月-moon-」 カットバックとシンクロニシティ

アヴァンには、人形を抱いてベンチに座っている女の子の姿がある。左足には赤い靴を履いているが、右足は裸足である。ベンチの端には、金髪の男の子が座っている。背景には、第1話に見えていた山景とは全く異なる、月に照らされた夜の街のビル群が見えている。女の子は誰に対して語るとでもなく、呟くように言う。「過去は戻らない。未来は見えない。私にあるのは、今。その瞬間だけ。蒼い月が見えるだけ。赤い血潮が見えるだけ。なんてつまらない、今。」



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

一方、第2話に登場したマーガレットが自宅の一室で見ているテレビのニュースは、遠い異国のガザス・ソニカ王国の陸軍司令官グエン・マクニコルの発した、武装抵抗組織ガルザに対する強硬な軍事的措置を講じる声明について報じている。

第1話に登場したマドラックスに、SSSから電話でミッションが告げられる。それは、王国式典に出席する予定のグエン・マクニコルの暗殺である。しかしその暗殺の依頼者は、マクニコル本人であるとSSSは語る。ミッションを引き受けたマドラックスは情報屋の店に赴き、ターゲットの陸軍高官の詳細を尋ねている。反乱軍鎮圧の急先鋒として王国陸軍を主導する司令官は、以前に敵組織ガルザによって妻を殺害されていたらしい。マーガレットとマドラックスを結びつける接点となるものは、偶々マーガレットの部屋のテレビが報じていたこのグエン・マクニコルという人物のみであるが、カットバックの手法を用いて併置された新登場の人物の存在が、可能世界としての意味構成軸の一つを形成し、物語の仮構的パースペクティブを構築することになるものと期待される。

マドラックスは有効な狙撃ポイントを探して、ビルの屋上から式典予定地の広場を見下ろしている。そこに現れて話しかけたのは、警戒パトロール中の親衛隊の女である。彼女もまた、グエン・マクニコルの身辺警護のために、狙撃可能地点の検証をしていたのである。身分証の提示を求められてマドラックスが差し出した証明書には、Nafrece 国民Laetitia Luneの名前が印字されている。ヴァカンスの旅行中であると偽ったマドラックスが、国籍に用いていたこの“ナフレス”という国名は、フランスのアナグラムをなしている。どうやらマドラックスの住むアジアの国ガザス・ソニカは、フランスを宗主国とした旧植民地ベトナムを思わせるものようである。しかし画面にあらわれた町並みは、看板の漢字表記などの中国文化的な印象から、イギリスの租借地であった香港のようなイメージを与えるものともなっている。現実世界との照合を容易に許さない背景情報における曖昧性は、このアニメ作品におけるジャンル特性を明かそうとしない統一的表現戦略と重なり合うものようである。さらにマドラックスがパスポートの偽名に用いた“レティシア”という名は、ストーリーの展開をもうしばらく追った後になってようやく、仮構的パースペクティブをなすべき意味軸の重要な交点として機能することになるのである。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

打ち解けた様子で会話を交わす親衛隊の女とマドラックスであるが、彼女が立ち去った後でマドラックスは呟く。「右腕の筋肉のつき方、右手の人差し指と親指の付け根…、そして…、怖い人。」観客には、マドラックスが狙撃手としての彼女の固有の知識と経験から、親衛隊の女の同業者としての実力を押し量り、この人物に尋常でない脅威を感じていることが読み取れる。しかし彼女の判断の根拠となった親衛隊の女の持つ具体的な身体的特質については、敢えて明確な情報は与えられることはなく、その詳細は伏せられたままである。意図的な情報の欠落が図られた、脈絡を欠いた不純物に充ち溢れる、あるがままの“現実世界”を反映する、ハイパーリアリズムの演出手法の特徴的な例の一つと言える場面であろう。第1話に登場した青年ピートにせよ、今回第3話でマドラックスがビルの屋上で出会った女親衛隊員にせよ、人物造形は際立って緻密であり、容易に端役と中心人物の区別を付けることができない、立体的な存在感を有

したものになっている。ピートはあっけなく第1話で絶命してしまったようだが、今後何らかの形で彼の存在が物語の意味構築に関わってくるのかあるいはそうでないのかは、容易く判断することができないのである。そしてこのアニメ作品の示す人物造形における卓越した具体性と、そこに重ね合わされた物語的パースペクティブ上の密度を押し量ることを困難にする意図的な情報欠落は、他の様々の登場人物達のそれぞれに対しても同様に指摘することができるのである。

不可解なミッションを引き受けてしまったマドラックスであるが、彼女の抱く関心と疑念は、依頼主の要求する任務の内容の理不尽さとは、また別なところにあるらしい。マドラックスは呟く。「失ったから、奪う。護れなかったから、仇を取る。グエン・マクニコル、自らの命を粗末にする人。教えて、何も無い人間は何をしたらいいの？何をすれば？」マドラックス本人が抱える、彼女の存在の背景にあるらしい謎が、むしろ彼女のこれからの行動と、彼女を中心に描かれる仮構世界の属質を決定する基本軸を形成するものであるらしい。しかし彼女の生い立ち等の現況の詳細と、彼女の発した不可解な呟きとの関連は、これ以上この時点で観客に対して明かされることはない。マドラックスが上で口にした奇妙な台詞の内実を観客が理解するのは、さらに深部にまでストーリーが進展した後である。

ここでまた、画面は唐突に戦場の村を映し出す。そこにあるのは、人形を抱いた少女の姿である。振り向く少女は声を発する。「何？お父さん、どこ？どこにいるの。私よ。私、ここにいる。」地面には、銃弾の穴の空いた認識票が転がっている。そこに少女の声に答える何者かの声がかぶさるが、その女性の姿は画面には示されない。「怖いよ、お父さん。一人は嫌なの。一人ぼっちは、嫌。」「それは、あなたの孤独。」「いつものように、絵本を読んで。」「それは、未来」「お父さんといったら、私、死んじゃうの、死んじゃうの。」「それは…」ここで画面はいきなり夜の風景に変わり、窓越しに木立を照らす下弦の月を映し出す。そこはマーガレットの寝室である。マーガレットはベッドで枕に顔を埋めて、眠ったまま呟く。「どうして、そんなこと…」遠い距離を隔てた旧宗主国ナフレスと、その植民地であったと思われるガザス・ソニカの間を繋ぐ未知の関係があることと、無意識の裡に何かを感じ取っているらしいマーガレットの姿のみが、映像で示されている。観客は、一意的に整理された咀嚼の容易な情報ではなく、この仮構世界の鑑賞をあるがままの実体験として享受し、自らの主観に応じてその“現実性”を確証していくかのごとくである。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

次に画面が映し出すのは、ホテルに潜入したマドラックスの姿である。通路でメイドの姿に変装したマドラックスを呼び止めたのは、ナフレスの競売場で美術品“琥珀”を競り落としていた、あの金髪の青年である。「以前お会いしたことがあったかな？」彼は、ヴァネッサとマーガレットの暮らしていたナフレスを離れ、今はマドラックスの住むガザス・ソニカにやって来ているようである。「お会いしたことはありません。」と答えるマドラックスに、「どうやら勘違いしたようだ。」と応じる青年である。この青年は、ナフレスとガザス・ソニカ、そしてマーガレットとマドラックスを結びつける役割を果たす存在であることが暗示されているようではあるが、未だに彼の素性は不明のままである。彼が第2話でブックワールド社の通路でマーガレットに声をかけたことと、この第3話でホテルの通路でマドラックスに声をかけたこと

の行動様式の一貫性が示唆する、フィクション的パースペクティブにおける固有の意味性が明らかになるのは、さらに様々な意味構成軸が断片的に蓄積された後になってからである。

グエン・マクニコルの部屋に潜入したマドラックスは、敢えて暗殺の依頼者でもあり、その対象でもある男の前に自らの姿を晒してみせる。窓辺のカーテンに身を包んで、顔だけを露わにしたポーズが印象的である。「初めまして。」「そんな所で何をしている。」「あなたにお会いしたくて。」「誰かね、君は?」誰何されたマドラックスは、マクニコルに語りかけて言う。「私は、あなたの依頼を受け、あなたを狙撃する者です。」「あなたのようなお嬢さんが、とても信じられない。それとも、私は夢の中にいるとでもいうのか?」「いいえ、すべて現実です。」「そうか、現実か。」ことさら驚きの表情をあらわすこともなく、落ち着いて酒を口に含んで確かめるマクニコルである。「現実だ。君もいかがかな。」「いいえ。」「しかしどうしてここへ? 依頼の時刻よりかなり早い。」「自分で自分を殺そうとする人と、話してみたくなくて。」こうしてマドラックスとマクニコルの間に、異様な会話が繰り返される。自分を殺害する仕事を請け負った見知らぬ少女を相手に、軍務の理不尽さと自身の生の空虚さと、世界の不条理について語り始めるグエン・マクニコルである。王国の陸軍司令官は、自分が見知らぬ何者かの掌の上で踊らされているだけの、操り人形のような存在であることを自覚している。「もしかしたら、妻の死ですら仕組まれていたものかもしれない。」マクニコルは、出会ったばかりの縁もゆかりもない少女に告白する。マドラックスは、何故か親密そうな素振りでマクニコルに手を差し伸べ、踊りでも踊るかのようにマクニコルに寄り添う。マクニコルは呟く。「ロマンチストだな、君は。」マドラックスは答えて言う。「きっと、月が蒼いから。」



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

マドラックスの台詞にある蒼い月への言及は、アヴァンにおける人形を抱いた少女の語っていた台詞との符丁によって、固有の意味構成軸を備えた仮構世界としてのアニメ作品『Madlax』の中で、特有のパースペクティブを形成することになる。現実世界に生起する出来事としては、力学的関連を持たない遠隔作用的現象等は全て、科学法則を逸脱する“スーパーナチュラル”（超自然）として、あってはならないこととされている。局所的な力学的作用の連鎖として出来事を線的な因果関係上に捉えて理解する科学的世界観においては、質量を持つ物体の運動として記述される物理的な現象生成という以上の“意味”を、世界に見出すことは認められていない。物理法則に従って必然的にもたらされる一連の力学的作用の系の外部に看取される相似は単なる偶然であり、その関連に内在的な意味を見出すことはあり得ないのである。意識の主体によって類い稀なる啓示として受け止められた事象も、神秘として人々の精神を揺さぶる衝撃的な出来事も、主観を投影した見かけ上の“類比”に過ぎないものである。あくまでも“ナチュラル”な合理的事象生成の相関に力学作用以外の秘匿された意味を読み取るのは、純然たる意識の作用である。しかし偶発的符丁として描き出される仮構内詳細記述の特質は、科学的世界観が“偶然の一致”として片付ける事象の中に、独特の“仮構的意味”が読み出されることを要請するところにある。

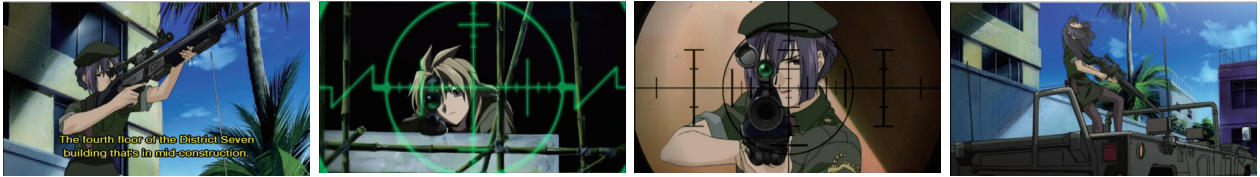
それはユングが“共時性”（synchronicity）という概念の提示を通して読み取ってみせた、意味ある世界として意識の主体と繋がるものである、宇宙の全体性を捉える発想と軌を一つにするところを持ってい

る。直接的には因果関係を持たないことが明らかである系外の事象が、あたかも運命に導かれているとも言えるような符号となる複合的な意味を兼ね備えたものとして、意識の主体によって実際に体験されるという啓示的現象が実際に存在することを認め、ユングはこの原理を“シンクロニシティ”という言葉で呼んだのであった。因果関係を持たない事象の間に主観的に意味ある何かを読み取ることができる現象とは、世界と個人の間にある見えざる関係性の顕現である。ユングは重力の法則が世界を支配するように、運命の法則ともいふべき“シンクロニシティ”があると理解して、現象世界の背後にある本質世界の実体を理解するための仮説として提唱したのであった。これと同様の、全体性の宇宙の本質を精神と物質が有機的な連続体を成す未知の存立機構を導入して理解する、包括的な世界解式の存在を反転的に示唆することにもなっているのが、仮構記述における偶発性の中に仕込まれた意味なのである。<sup>i</sup>

デモクリトスが物質を構成する不可分の基本単位として構想した、粒子のイメージに基づく仮想存在である原子とは異なり、存在様態を座標上に一意的に特定することができないという多義的特性を本質的に備えた量子の存在性向が突きつけた、従来の存在概念を揺るがす深刻な同一性判断基準に関わる問題点に真正面からいち早く対応したのが、物理学者ウォルフガング・パウリとの討論を通じて物理と心理の繋がりを捉える新発想に踏み込んだ“深層心理学者”ユングであった<sup>ii</sup>。仮構記述におけるカットバックの手法は、量子力学の新規の存在概念の発見を通して示唆されることになった、“アクチュアリティ”という“リアリティ”の延長線上にある心霊的世界像の有様を、別な角度から照射することにもなっているのである。カットバックの手法を畳み込んで提示される、科学思想の概念的拘束から解放された偶発的生起の啓示的な認知として得られる類比的表象は、万人に対して共通であるとされる“客観的”意味の存在を仮定し、本質的意味性の不在を前提とする科学的世界観を超出する、形而上界面で新たに主張される“仮構的意味”の宇宙論的意義性を示唆してもいる。そしてこの新規の存在論的発想は、個人存在の同一性に関わる重要な最終主題として、このアニメ作品の創作理念とも深く結びつくことになっているのである。

暗殺対象である人物との会見を企てるという、異常な行動を取るマドラックスの意図も目的も全く明かされることのないまま、観客は彼女の発した言葉と仕草を即物的に目と耳に焼き付けることになる。これは彼女の相手をしているグエン・マクニコルの場合に関しても、全く同様である。方向性の定まった類型的なストーリーの進展のために用意された、当たり前前に“噛み合う”類いの会話とは対照的に、独特のリアリティを持った印象的な台詞のやりとりが、未知の要素のあまりにも多い主人公と、彼女といかなる関係性を築くことになるのかが全く不明の、しかし鮮明な人格的造形を与えられた男との間に交わされていくのである。視聴者が検証しつつある仮構世界を、既存の概念的範疇に容易に組み込み得る意味的投影として確定してしまうことを避けて、不確定要素に満ちた基本軸を持つ未知の範疇に属する新規の可能世界の、あまりにも豊かな固有の実質性を備えた表象として成立させることに大きく寄与しているのが、彼等の発するこれらの台詞なのである。この台詞造形の特質は、『Madlax』というアニメ作品の成立基盤を構築する基本戦略として、今後他の様々の人物についても同様に効果的に適用されていくことになっている。

式典の場でいよいよ遂行される、マドラックスの狙撃である。第1話の戦闘シーンにあった“ヤンマーニ”のリフレインが印象的な挿入歌“nowhere”の長回しを再現して、この任務遂行の暗殺シーンは描かれている。事件の勃発に反応して狙撃地点をいち早く特定し、遠く離れたビル上で潜伏するマドラックスの姿を望遠レンズのスコop越しに捉えた親衛隊の女である。しかしマドラックスは、自分を狙撃しようとする相手に一足早く銃撃を加えることに成功する。マドラックスの放った銃弾は、親衛隊の女のベレー帽を弾き飛ばしていた。かろうじて難を逃れたマドラックスは、改めて呟く。「怖い人。」



©2004 ビートルレイン/フライングドッグ

その時、ホテルでマドラックスに声をかけた金髪の青年が、何者かに電話をして、グエン・マクニコルの暗殺事件について報告をしている。「まさかあの男にあんな覚悟があるなんて思いもしませんでした。はい、大丈夫です。代替りの者はいくらでもいますから。」彼は暗殺事件の被害者である陸軍司令官の意図を、既に感知していたようである。この青年は、グエン・マクニコルを背後で操っていた組織に関係を持つ人物のようであるが、彼がどのような形でこの物語のストーリーに関わってくるのか、あるいは本筋に関与することのない末端の人物に過ぎないのかは、この時点では全く予測することができない。

目撃した狙撃犯について、上司に報告する親衛隊の女である。「スコープ越しに犯人を見ました。ブロンドの髪をした少女でした。」彼女は親衛隊長に、この凄腕のエージェントの名前がマドラックスであることを告げられる。マドラックスに「怖い人」と呼ばれたこの親衛隊の女も、金髪の青年と同様に今後のストーリーの展開に深く関わってくるのか、あるいはこの時限りの偶発的な関わりを持っただけの人物に過ぎないのか、やはり現時点の観客の視点からは全く判断することができない。むしろあっけなく暗殺されてしまったグエン・マクニコルという人物の存在感こそが、ことさらに印象的なのであった。これは第1話でマドラックスと仮初めの出会いを果たしながら、敢え無く絶命してしまった青年ピートの場合と同様である。各々の登場人物がそれぞれに豊かな人格的輪郭を備えながら、中心人物と端役の違いを明らかにすることなくあるいは生き延び、あるいははかなく命を失ってしまう有様は、典型的な仮構の約束事を踏み越えて、むしろ際立って“現実的”なものである。リアリズムを標榜する仮構に描かれるステレオタイプ的な“現実感”の界域を超出して、何よりもあるがままの世界が提示する不気味で意味不明な“現実的”実在感を与える、ハイパーリアリズムの描写手法が採用されていることを実感させるのが、彼等に施されているキャラクター造形である。

マドラックスとマーガレットがいかなる潜伏した関係性をこれから露にしてくることになるのか、これら二人の少女達に金髪の青年がいかなる関わりを持つことになるのか、そしてまた脈絡無く登場する人形を抱いた少女が彼等とのどのような関係性を明らかにすることになるのか、さらにこれまでに登場した他の何人かの人物達がそこにどのように関わってくるのかについては、未だ展望は開けないままである。

#### 第4話「誘惑 -ask-」 カットバックと精神感応

アヴァンには、雨の中のパトカーと路上に横たわる赤い服の女が映し出されている。その次には、室内で電話越しに誰かに指示をしている男の姿がある。「あの少年を送り込むことで、ガルザに何らかの変化が起こるかもしれん。そのためにも最高級のエージェントを手配してくれ。」そこに若い娘がドアを開けて男の部屋に現れ、彼に告げる。「どうしよう、パパ。私ね、パパが嫌いだった。…教えてもらった。」娘は突然、両手を伸ばして男の首を絞めつけながら、異様な言葉を呟く。「エルダ・タルータ。」再び画面は、雨の路上に横たわる娘の姿を映し出している。室内の男は、窓際にもたれて絶命している。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

第4話の表題のテロップの後には、暗殺されたグエン・マクニコルの後任について事務的に善後策を検討するあの金髪の青年と、その仲間達の姿がある。しかし彼等がいかなる組織に属する人員であるのかは、ここでは明かされることは無い。再び画面はカットバックされ、ガザス・ソニカの暗殺事件に対応して会社施設の警備レベルの拡大を検討する、ヴァネッサと彼女の同僚のチャールズ・ウィンストンの姿を映し出す。ブックワールド社は、ガザス・ソニカの産業に多大の資本を投下しているのである。次に現れた画面には、殺人事件の捜査を行う刑事達の姿がある。ナフレスの政治家ピエデリカ・モレーを殺害した後、路上に身を投げて亡くなっていたのは、彼の娘アンヌ・モレーであった。刑事達は困惑しながら、殺害動機の不明なあまりにも不可解な事件の捜査を行っている。

市警のマクレイ・マリーニは、殺害現場に現れたマーガレットに声をかける。この回の主人公の役割を果たすのは、マドラックスあるいはマーガレットではなく、モレー殺害の捜査を担当する今回初登場のマリーニ警部である。マリーニ警部は、マーガレットに生前のアンヌ・モレーの様子について質問している。画面にはマーガレットの回想の中の、アンヌ・モレーの姿が映し出される。二人の周囲には、黄色い花が咲き乱れている。再び画面は切り替わり、遠く離れた異国のマドラックスの姿を映し出す。マドラックスは呟く。「あれは、花。黄色い花。」全く因果関係を持たない、別のストーリー空間における純然たる偶発的な同調が、仮構世界提示の手法としてその素性が未定のパースペクティブの存在を窺わせている。“隠れた変数”<sup>III</sup>を螺旋状に迂回して間接的に炙り出すかのように仮構世界を描き出していくのが、このアニメの表現手法のようである。マーガレットは、亡くなったアンヌのために花屋で黄色い花を買う。店員に教えてもらった花の名前は、ヘリアンサスである。お互いの存在を知ること無く、遠く離れた異国で同じ時刻に同じものを指示する言葉を呟くマドラックスの姿は、マーガレットとの未知の繋がりか、あるいは精神感応のようなものの存在があることを暗示するようにも思える。しかしながら観客に対して一切の明示的な説明に当たるものを与えることなく、淡々と映像記述のみを重ねて仮構内出来事の表層のみを描写していくのが、このアニメ作品の採用した表現戦略である。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

遺留品の捜査の結果、アンヌ・モレーのコンピュータは、ハッキングされて情報が消去されていたことが分かる。復元されたデータを開いたモニターには、“エルダ・タルータ”という文字列が画面一面に並んでいる。マリーニ警部は、分析担当官に尋ねる。「この記号は？アンファン？」担当官は、復元されたデータの中に国際犯罪情報組織アンファンの形跡があることを指摘する。マーガレットはアンヌ・モレー

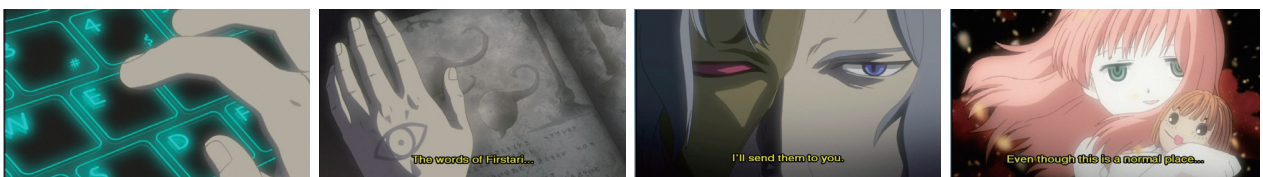
の事故現場にヘリアンサスの花を捧げにやって来て、マリーニ警部はこの花を代わりに預かる。捜査の結果、ピエデリカ・モレーはガザス・ソニカの内戦で被害者となった孤児達の支援を行っていたことが分かる。捜査を続けていくマリーニ警部の許に、アンファンからの警告がもたらされる。「手を引け。…目覚めたいのか？…目覚めたくなければ手を引け。」マリーニ警部はこの不気味な警告に耳を貸そうとせず、捜査の続行を宣言する。ここで唐突に、画面には人形を抱いた少女が映し出され、彼女は呟く。「駄目。それは駄目よ。」どのようにしてこの少女がマリーニ警部の言葉に反応したのか、彼女とマリーニ警部の関係に当たるものとしてどのような要因があるのかについては、やはり一切与えられる情報はない。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

マリーニ警部には警察本部からの圧力がかかり、捜査の妨害が行われ始める。そればかりか、支払いにしようとしたクレジットカードの不可解な失効やキャッシュカードの機能不全に加えて、帰宅した自宅の部屋の家電製品の誤作動など、常識では考えられないような異様な事態が、彼の周囲で頻発し始める。

コンピュータを操って、どこからかマリーニ警部に情報攻撃を仕掛ける仮面の男である。公衆電話さえもが、彼の母親との通話を阻害して、マリーニ警部の精神の安寧を揺さぶるような、異様な働きを示す。何故か仮面の男が持つ本の1ページが画面に示されると、その挿絵のような図案は、マドラックスの部屋に貼ってあった紙片とよく似たものである。「これがアンファンのやり口か。」マリーニ警部は苛立たしげに呟く。それと同時に、電話ボックスの脇の店のショーウィンドウの中に並んだディスプレイ端末に、次々と異様な文字列が表示されていく。仮面の男は、遠く離れたマリーニ警部に語りかけて言う。「目覚めの言葉、ファースタリー。君に送ろう。エルダ・タルータ。」画面には、精神を錯乱させていく生前のアンヌ・モレーの姿が映し出される。仮面の男はさらに続けて言う。「これが、ファースタリー。これが、本質への扉。平和など、人が造り上げた幻想に過ぎない。」この言葉に、人形を抱いた少女が反応する。「誰かが、私に触れようとしている。ここは普通場所なのに。」映像は、様々な人物たちの精神を錯乱させていく様子を暗示的に示している。マーガレットも、人形を抱いた少女と同じように、何か得体の知れないものの影響力を感じ取っている。路上で原因不明の動揺を来したマーガレットを心配して、エリノアが声をかける。「どうかしましたか？お嬢様。」マーガレットは答える。「分かんない。分かんないけど、何かが。」しかし画面は、異国のマドラックスの姿を映し出しているのである。アンファンと呼ばれる国際犯罪情報組織がコンピュータを用いて行う操作は、機械的な情報処理のレベルを超えた、超自然の効果をももたらしているものらしい。「普通場所」にいると語る人形を抱いた少女は、空間の断絶を超えてその影響の全てを感知することができているようである。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ



仮面の男は、コンピュータの操作を通じて、様々にマリーニ警部の精神に悪意ある干渉を企てていったように思える。しかしこれらが具体的にどのようなメカニズムを用いて、いかなる性格の心霊的ダメージを彼に与えているのかについては、この時点では明確な概念を当て嵌めて理解することを妨げられているのである。客観的には単なる偶然の積み重ねとしか理解のしようもない、しかしこれらの事象を体験する当人にとっては世界の有様に対する認識の根底を揺るがすような不安を覚える様が、概念的説明を省いた映像によって、巧みに描き出されている。伝統的な怪奇小説の枠組みを超えて20世紀以降に現出した、“サイコ・ホラー”と呼ばれる映画や小説作品と繋がる要因が、視聴しつつあるこの仮構作品の足許から滲出してきただけを感じさせるのが、国際犯罪情報組織アンファンによって実行された、マリーニ警部に対する精神攻撃の有様であった。路上でマーガレットの前に現れたマリーニ警部は、声をかけられてもマーガレットのことを思い出せないばかりか、自分の名前さえも忘れてしまっている。意思を失って機械人形のような有様のマリーニを、車に乗せて連れ去って行くあの金髪の青年である。車の中で青年は、マリーニ警部に語りかける。「君は、これからアンファンとして生きる。情報の中で生きる。」

その頃、これらの事件とは一切関わりをもつことのない筈の、遠い異国に住むマドラックスが、電話でミッションを伝えてきたスリー・スピードに語りかけている。「ねぇ SSS、ヘリアンサスの花言葉って知ってる？…花言葉は、誘惑よ。」マドラックスが何を見て、何を感じてこの言葉を電話の相手に語っているのかは、示されていない。むしろ具体的な因果関係を持たない超自然的な精神感応のようなものか、もしくはさらに得体の知れない、世界を支配する未知の力がもたらした不気味な偶然の一致のようなものが、マドラックスとマーガレットという存在を結びつけているという、漠然とした印象が醸成されているのを確かめることができるのである。ここに至ってこのアニメ作品が暗示するジャンル規定的要素は、既存のサスペンスやミステリーの域を超えて、新種のスリラーか、心理的なホラーの可能性さえも示唆するものとなっている。それは言葉を変えて語るならば、“悪しき神”が世界を支配しているという実感にも近い。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

今回登場したマリーニ警部も、ストーリーを主導するに足る十分な存在感に溢れたキャラクターのように思われたが、アンファンの不可解な精神攻撃の犠牲となって、人間性そのものを喪失して敢え無く破滅してしまったかのように見える。第1話のピートや第3話のゲン・マクニコルのように実際に命を失ってしまった訳ではないが、むしろ暗示とも攪乱ともつかない不気味な心霊操作によって精神を破壊されてしまう姿には、底知れない恐怖を感じさせるものがある。彼の場合は、直接マドラックスと関わりをもった訳ではないものの、何らかの未知の要因を通じてマドラックスと繋がる者達はいずれも命を失うか、これに近い結末を与えられているのである。仮構的パースペクティブを自覚する視聴者は、このパターンが後に続く各回にも踏襲されるのか、あるいはその変化形もしくは例外的パターンが現出するのかに関心を集中させることになる。あるがままの現実世界とは異なり、視聴される対象として提示された仮構世界には、何らかの意味を読み取る基準となるべきパースペクティブが用意されていなければならない筈だからである。手掛かりとなりそうなものは、人形を抱いた少女が語っていた“普通の場所”という言葉であった。

彼女の言う“普通”の内実を、情報の欠落を補いながら我々の様々の既存の知識を当て嵌めて推し量ることにより、このアニメ作品の巧みに秘匿された主題の一端を掬い取ることができるかもしれない。しかしその作業を遂行するためには、もう暫く座標原点の在り処を宙吊りにしたまま、派生的に現出する夾雑物に満ちた、仮構的諸現象の一つ一つを確認していくことを強いられるのである。

結局のところ被害者の実の娘を道具に用いて実行された、不可解な政治家ピエデリカ・モレー殺害の具体的な方法も、その動機あるいは目的も結局捜査担当者自身の破滅と共に、一切解明されることなく棚上げされ、この回はある意味消化不良のままに収束を迎えてしまったのであった。作品の全体像が何を取り上げ、どのように主題を整理していくのかがさらに混迷を深めて意味性把握の抛り所が遠のいていく様は、作品から意味を読み取るという暗黙の約束事項の転覆そのものを主題とするメタ主題提示の試みなのか、もしくはさらなる高次元の統合的意味構築情報が開示されることになるのかの関心を宙吊りにする、メタ・サスペンスの可能性も含んでいるのであった。

### 第5話「無在 -none-」 消滅あるいは非存在

アヴァンでは、深夜の港で闇取引をしている怪しい男達の姿がある。物資を運んできた密輸入者を待ち構えていた男達の実行する非情な殺害現場を目撃して、船上から海中に逃れて姿を消す少年がいる。

テレビのニュースは、武装抵抗組織ガルザのリーダー、ミン・デュルクの声明について報じている。その内容は、3話に登場していたグエン・マクニコルの暗殺にガルザの関与はない、とする宣言であった。起こった事件とそれを報じるテレビのニュースを通じて、既存の人物間のカットバック的な接続を行うというストーリー記述上の枠組みは、第3話にあった演出機構を踏襲するものになっている。このような繰り返しやその変化も、当然仮構的パースペクティブを形成する積極的な要素として認められるものだろう。自省的な演出家が創意工夫を凝らすのが、ストーリーそのものやキャラクター特性以外の、むしろ些末な出来事を語る演出手法の部分なのである。時にはストーリーやキャラクターは際立って典型的で陳腐でさえある方が、このような演出的妙味を際立たせることが出来もするからである。

今回も、SSSに電話を通じてミッションを伝えられるマドラックスである。SSSは状況について語る。「ナフレスの市民団体から、抵抗組織ガルザに向けて秘密裡に物資が輸送された。」マドラックスに与えられた任務は、アンファンによって狙われた“物資の回収”である。しかしその“物資”の内容の詳細は、不明であるとのみ告げられる。フリーのエージェントに対する依頼としては余りにも漠然とした仕事内容である。

情報屋に非合法の輸送ブローカーの中の行方不明者の情報を問い合わせ、バイクを駆って港湾地区の関係者に様々に当たりを付けて、“物資”の消息を尋ねようと試みるマドラックスである。そこに冒頭で船から海中に姿を隠した少年が現れ、マドラックスに銃を向けて言う。「申し訳ありませんが、僕にこのバイクを貸して頂けませんか。」強奪を企てた割には、その口調はあまりにも丁寧であり、短銃を突きつける動作もおぼつかない。マドラックスは慌てる素振りも無く、自らも素早く銃を引き抜いて少年に突きつける。少年はあっけなく銃を手放して降参する。そこでマドラックスは何を考えたものか、少年に自分をデートに誘うようにもちかけ、バイクを用いての助力を申し出る。あまりにも大人しい品の良さそうな少年の行動と、不可解な人なつこさを示すマドラックスの姿が、背景や動機は不明ではありながら、ここでは独特のリアリティを構築している。このアニメ作品独自の創作戦略とも言うべき、ハイパーリアリティを具現したアクションと台詞のやりとりが達成されていることを、この場面でも確認することができる。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

軍の施設の一室で、密航者の少年の写真を確かめているアンファンの金髪の青年の姿がある。彼は直接マドラックスやマーガレットの行動に関与することはないものの、毎回のように彼等の周辺に姿を現して、この仮構世界の軸を形成する未知の要因の存在を匂わせている。金髪の青年にこの部屋に呼び寄せられたのは、第3話でビルの屋上でマドラックスと出会う言葉の交わした、親衛隊の女である。ドアを開けて入室し、名を名乗る彼女の言葉から、彼女の名はリメルダ・ユルグ少尉であることが、ここに至ってようやく判明する。挨拶を返す金髪の青年の名前は、カロッサ・ドーンであった。第1話のマドラックスと第2話のマーガレットの場合ばかりでなく、このアニメに登場するそれぞれの登場人物の名前は、仮構記述のコンヴェンションを踏襲して直截にナレーションを用いて語られることもあるいは説明的なセリフ等を介して視聴者に告げられることもなく、仮構内の人々の出会いとその際の台詞のやりとりを偶発的に観客が傍受したかのように、ハイパーリアルな過程によって確認されることになっているのである。



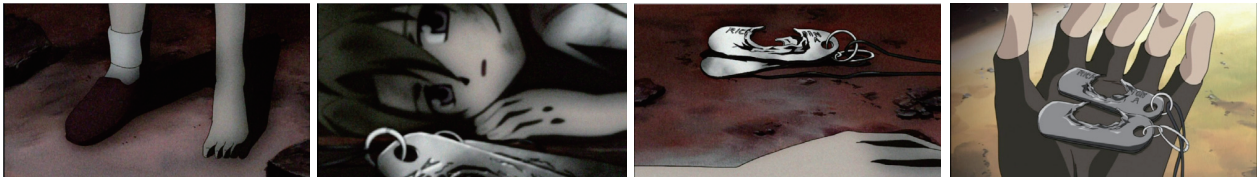
©2004 ビートレイン/フライングドッグ

カロッサの依頼は、密入国者の少年の拘束である。「その少年は、私たちの企業に不利益をもたらす。自由にしておくことはできません。」カロッサは、軍の親衛隊所属のリメルダに任務の依頼をした理由を語る。「あるエージェントがこの一件に関わっているという情報を入手しました。少尉はその人物の名をご存じの筈だ。」リメルダは答える。「マドラックス。」カロッサは応じる。「そういうことです。」

ホテルの一室で、知り合った少年と話をしているマドラックスである。密入国者の少年の名は、クリス・クラーナであった。クリスは、現況を説明して語る。「死んだ母さんが言ったんだ。ガザス・ソニカに父さんがいるって。…父さんは抵抗組織にいるらしい。」さらにクリスは、これまで解明がなされていなかった謎の一端を解きほぐす情報を、観客に与えてくれることになる。「手助けしてくれた人がいたんだ。ピエデリカ・モレーさんといって、ナフレスの政治家…」ここで初めて、第4話で娘の手にかかって不可解な死を遂げたピエデリカ・モレーが、冒頭の場面で電話を通して指示をしていた要件の内容が判明する。モレーはある意図を持ってクリス・クラーナをガザス・ソニカに送り込み、彼の身辺警護のためにエージェントのマドラックスを雇っていたのであった。その際にモレーは、クリスに一つの依頼をしていたのであった。「12年前に起きた内戦。その発端となった理由を調べ、私に教えて欲しい。」ガザス・ソニカに起こった内戦の原因には、何かいわくがありそうだというのである。

クリスを目的地近くまで案内し、見送るマドラックスである。クリスの後ろ姿を見つめるマドラックスに、過去の戦場の有様が思い出される。右足だけに赤い靴を履いて、戦場を彷徨っている少女の姿がある。

その少女の外見は、あの人形を抱いた少女のものとは異なり、マドラックス自身の幼い頃の顔かたちである。周囲に炸裂する砲弾の中で、少女は眩く。「どこ、どこにいるの、お父さん。」間近で爆発した砲弾に弾き飛ばされて倒れ伏した少女の足許には、ちぎれた本のページと穴の空いた認識票がある。回想の中の少女は、手を伸ばして穴の空いた認識票を拾いあげる。過去の夢から醒めた現在のマドラックス自身も、左手に穴の空いた認識票を握っているのである。「どこかにいる。この国のどこかにいる。」クリスと同様に、マドラックスも幼い頃父親と別れ、その消息を探し求めているものらしい。第1話で救出した青年ピートを見送りながらマドラックスが目にしてきた幻影は、彼女の父親の後ろ姿であったらしいことが分かる。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

目的地に歩いて向かうクリスの許に突然車に乗った一団の男達が現れ、クリスを殺害しようと襲いかかる。そこにバイクで突入し、銃撃戦を展開して男達を倒し、クリスを救出するマドラックスである。「まさか、私が回収するのがあなただなんて。」ようやくマドラックスは、自分に要請された“物資の回収”という任務が、クリスを対象としたものであったことを理解する。クリスは、マドラックスに問われて自分の父親の名を教える。その名は「ミン・デュルク。」である。マドラックスは、クリスの父親が反政府抵抗組織ガルザの指導者であることを知り、アンファンがクリスを狙う目的を理解する。

クリスの足跡について報告を受けたカロッサアは、リメルダと共にクリスの後を追う。ヘリコプターに乗ってやって来たカロッサアは、クリスに先んじて彼の目的地近くに先回りし、リメルダと共に峠で待ち伏せをすることに決める。リメルダは、マドラックスとの再会に期待感を隠せない様子である。しかし頭上のヘリコプターをやり過ごした後、カロッサアの計画を予期して巧みに待ち伏せを出し抜いて、不意打ちに成功するマドラックスである。リメルダとの対決を行う戦闘時の視線は、やはり第1話の戦闘シーンの時と同様に対象から目をそらし、他所を向いた独特のポーズである。追っ手を排除してもらったことを確信したクリスは、立ち去り際にマドラックスに声をかける。「三日後に、あの部屋で待ってる。」マドラックスも答える。「約束ね。」

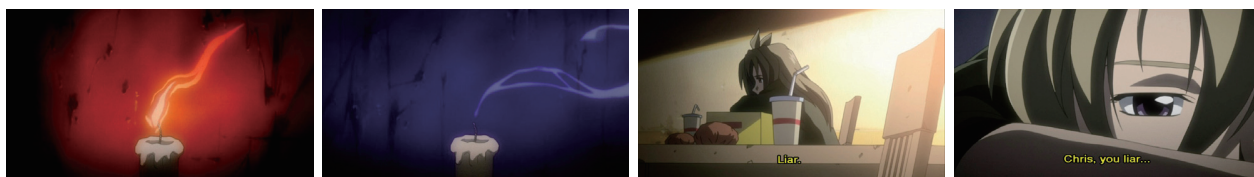
カロッサアは任務の失敗にも関わらず、マドラックスの姿を眼前にして何故か満足そうに語る。「私は君という存在を、この目で見てみたかった。マドラックス、君に会いたかったんだ。」カロッサアの眩く言葉の意味と彼の想いの真相と、彼が背後に背負っているらしい事情については、この場では一切語られることはない。さらに全ての謎が解けた後にこの場面を振り返ってみれば、カロッサア本人もこの時の自分の想いの背後にある未知の要因を、全く自覚していなかったことが分かるのである。



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

ガルザのメンバーに迎え入れられて、ミン・デュルクの許に案内されたクリスがやって来たのは、城のような異様な姿をした館である。案内人はクリスに告げる。「あの中に我らの指導者、そしてあなたのお父上であるミン・デュルク様がおられます。」広大な館の中の調度は、戦闘中の反政府組織には似つかわしくない、豪華なものであった。異様な挿絵のある本を閉じて、クリスを迎えた仮面の男が語りかける。「ようこそ、ガルザの中心へ。私は君に教えたことがある。ここにミン・デュルクという男はいない。いや、現実に存在すらしていない。」彼は第4話でマリーニ警部に不気味な精神攻撃を仕掛けていた、国際犯罪情報組織アンファンの仮面の男である。彼が手を乗せていた本の挿絵が、一瞬の映像を用いてその符丁を確信させている。仮面の男は、さらに続けて不可解な言葉をクリスに突きつける。「アンファンの情報の中に、君がクリス・クラーナだという事実はない。…君はこの世界に存在していない。12年前の事件で、歪められたものだった。」マリーニ警部の場合と同様に、クリスに精神的な動揺ばかりでなく、根源的な存在のあり方を攪乱させるような影響がもたらされている様が描かれる。この後画面に映し出されるのは、風に吹き消される蠟燭の灯火である。映像表現としては、むしろ陳腐なほどにしばしば死を暗示するのに用いられる映像記述であるが、クリスがこの場で実際に殺害されたのか、あるいは他の何らかの異常が起こったのかについては、定かにされることはない。第5話の題名にあった「無在」が、クリスのいかなる体験あるいは遭遇した現象を指すものであるのかは、暫く後になってから漸く瑣末な物語記述を通してさりげなく明かされることになるのである。仮面の男が語る12年前の事件の内実も、その真相が観客に明かされるのは、まだずっと先のことである。

画面は切り替わり、夜の街のビル群を映し出す。次には邸宅のバルコニーで、マドラックスとの遭遇を回顧するカロッサアの姿がある。なぜか満足気に彼は呟く。「あの娘がマドラックス。美しく、しなやかで、そして強い。」アンファンとガルザとの関係など、これまでに断片的に現出していた背景情報のいくつかと、これに関わるらしい人物は繋がりを深めてきたものの、主人公が敵として戦う相手が誰になるのか、いかなる目的を持ってどのように遂行することが全ての意味性を統一させる見通し図を形成することとなるのか、物語の価値観を決定する筈のキャラクター個々の行動目的を収束させるべき物語自身の意味性の開示は、むしろ遠のいていくばかりである。クリスとの約束の場となったホテルの部屋には、クリスの来訪を待つマドラックスの姿がある。クリスの荷物が残されたままで、やはりクリスの姿はそこには現れない。マドラックスは顔を俯けて呟く。「嘘つき。クリスの嘘つき。」



©2004 ビートレイン/フライングドッグ

## テキスト

本稿の指摘の具体例として用いた画像の引用は、全てDVD *Madlax: The complete Collection*, (AMA INC, 2007) より抽出したものである。原作は日本語版の作品であるが、映像に付随する文字情報を確認するため、英語版のDVDで英語字幕の表示をした映像を出典としてある。映像の引用については著作権保持者であるフライングドッグに許可を頂くことができた。ご理解を感謝致します。

## 註

- i “偶然の一致” (coincidence) とは、科学的世界観の前提において規定される概念であろう。引き起こされた事象の間に直接的な因果関係が存在しないが、偶々関連のありそうに見えるだけの出来事が生起することを指して“偶然”と呼ばれるからである。それらの出来事は本質的には無関係だが、あたかも“同調”という意味があるかのごとく主観的に錯覚されただけである。これに対応する宗教上の概念として、キリスト教における“神の配剤”、あるいは“摂理” (providence) がある。“分け与えること”という字義から推測されるように、人には測り知ることのできない不思議な配慮をもって、理解不能だが深遠な知恵によって様々な出来事がもたらされていることを認めるこの発想は、人間の理性によってあらゆる事象が原理や自然法則の形で確認されることなどは、あり得ないことを前提としている。東洋思想における“天啓”という言葉も、これと同等の概念軸に属するものであろう。共に事象生成の根源的な意味は存在するが、それが人間知性にとって意味性を読み取る体系を構築することが飽くまでも不可能であることが、むしろ大前提となっているからである。
- 相異なった宇宙論を背景とするこれらの対照的な概念と比較して、現在我々が生起する事象の意味性を再考察するのに役立つ好便な仮構空間として、ゲームの仮構世界がある。ゲーム空間においては、色々な出来事を経験することによって条件が満たされ、ストーリーを先導する岐路の出発点となる“イベント”が発生して、世界のさらなる展開の道が開けていく。この繰り返しによって最終的には予定調和を具現する“トゥルー・エンド”を達成することができる。ゲームはそのように予めプログラムされているのであるから、これは当然のことである。各々のプレイヤーがそれぞれに選択肢を選んでプレイを進め、エンディングを迎えることが意味を持つように、ゲーム世界は造られている。イベントを起こすきっかけとなる一つ一つの行動には、因果関係としてゲームクリアの達成をもたらす直接的な機能は備わっていない筈だが、その一見偶然の一致に見える関連が、ゲームとしてのプログラム上では不可欠となっているのである。機械的な因果関係の連鎖とは離れた、偶然と必然の区別を設ける意識から超然として遊離している別空間として、ゲーム的仮構の時空は成立している。
- ゲーム的仮構世界との比較から“シンクロシティ”の発想を再解釈してみるならば、“世界”という概念は、個人の主観として感じ取られる心の中の存在であり、ゲームに用意されている“エンド”と同じように、確定した“結末”や“達成”という意味を持つものとして存在することになる。言い換えれば、この世界は自分がプレイするためのゲームとして、そのような意味を確立させるための場としてある。一人一人が世界のプレイヤーであり、その限りにおいて世界の主役である。個人の意思や意識と関係なく客観的な物理世界が存在していて、その存在意義などというものはもともと存在しない、と考えるのが科学的世界観の前提であった。科学の前提に従えば、世界は誰から見ても同じ客観的な“意味を持たない”ものなので、必然的な因果関係の連鎖から導かれる全ては、根本的には単なる“偶然の一致”に過ぎない。トゥルー・エンドもバッドエンドもなく、始まりもお終いもなく、時間がただただ流れているに過ぎないのが、我々の生きるこの世界の実情である。
- ゲーム的仮構世界の存在論に対する理解を敷衍するならば、科学思想が標榜するこの絶望主義的な世界観を転覆するための潜勢力として、集合的無意識が滲出する原型的心靈場のエネルギーが、現象世界に“仮構”という概念存在を現出させていると考える仮説も主張し得るだろう。仮構は世界に対する意味性賦与を行うことにより、集合としての心靈に癒しを与えているのである。
- ii ウォルフガング・パウリとユングの経験した心靈的物理現象 (psychophysical reality) を、量子力学と錬金術の理念の統合的再評価を通して研究しているレモ・F・ロス (Remo F. Roth) は、彼の一連の論文「ウォルフガング・パウリの夢と洞察」“Wolfgang Pauli's Dreams, Visions and Insights as Basis of My Shamanistic Healing Method of Body-centered Imagination” (2014) において、“パウリ効果”と一般に呼ばれている超常現象の実体を、パウリという個人存在の心靈的分離から生成された、パウリの意識下の“魔術師”人格がもたらした物理現象として指摘している。レモ・F・ロスによれば、素粒子の持つ属性として“スピン”という粒子存在に帰属する概念を考案して、物理学界の難題であった量子存在の実験結果の矛盾を回避させることに成功した物理学者としてのパウリの功績に反発する、この天才的な物理学者自身の影の人格である彼の夢の中の“魔術師”が、意図的に物理学者としてのパウリの行動を阻害するために行った物理的干渉が、パウリ効果と呼ばれているものの正体である。全体性の宇宙論を支持するパウリの裏人格である“魔術師”は、ヘルメス学的な“Unus Mundus”の発想を用いて理解すべき世界観の根幹に関わる重要な事象を、従来の物理学の理論に制約された原子と同等の属性である“スピン”という概念に失速させてしまった表の人格のパウリを許せなかったというのである。ユングの提唱したアクティブ・イマジネーションを修正する肉体感覚イマジネーション (body-centered imagination) の適用を通して、ユング=パウリの交換書簡の新たな視点よりなされる検証から、人格の分裂とその結果もたらされた物理現象の実例が得られることを、レモ・F・ロスは主張しているのである。人格の分裂とその現象界面への現れの具体例を示唆するロスの考察は、『Madlax』に導入された人格の分裂と影の生成の主題の背後にある宇宙論的な原理機構を推測するための、有効な視点を提供してくれている。
- iii J. S. ベルやデイビッド・ボーム等によってそれぞれの含蓄を担わされて新たに導入された“隠れた変数” (hidden variables) という概念は、実験結果において量子の示すエネルギー保存則を逸脱する存在論的矛盾を回避するために採用されたものであった。非決定論的に振る舞うかのように見える量子存在を決定論的な枠組みの中で解釈するために、未知の要因を導入することが試みられたのである。パウリの導入した“スピン”という概念は、この場合と同様に科学の前提を覆すかのように思われる量子の基本特質を従来の科学的世界観の枠内で解決することができたために非常に効果的であったが、レモ・F・ロスはこれをむしろ、パウリ自身の心靈の分裂を招くことになった問題の原因と見たのである。しかしスピンの場合とは対照的に“隠れた変数”という発想は、意味を構築すべき論理体系の中に未定義の空白領域を敢えて残そうとする、ある意味で矛盾を含む試行ではあった。キリスト教信仰における自然 (ナチュラル) は、神によって是認される、人によって理解可能な穏健な意味であった。しかし神の権能の圏外には、人によって触れられることが許されない知識と技術が有り、それは超自然 (スーパーナチュラル) と呼ばれて、悪魔の力の及ぼされる魔法の技とされた。世界には、穏健ではない問題性のある“意味”が確かに隠されていたのである。しかし錬金術の思想を再評価したルネサンスの哲学者達は、むしろ魔法の禁忌の中こそ世界に対する真の理解と意味の発見があるとして、超自然の界面に踏み込んだのであった。ベルやボームによって示唆された“隠れた変数”という発想は、キリスト教の宗教的束縛から解放された科学思想の裡においても、合理的論理体系の外部に延長される未知のパスpekティブの存在に対する自覚が得られた事実を反映しているように思える。『Madlax』における、典型的意味の判読を拒絶するような仮構世界記述の手法であるハイパーナチュラルな描写は、全方位的パースpekティブ延長の試行を通して、意味の破壊と網羅的な意味の構築の双方を実行しようとしているかのごとくである。

黒田 誠 (和洋女子大学 人文社会科学系 准教授)

(2016年11月15日受理)